

小学校



神奈川県教育の 取り組みを紹介します

教科横断的な学習から 月や太陽の大きさのイメージをつかむ

小学校では、高学年を中心に組織的な指導力・対応力の向上をめざした教科担任制を推進しています。専科教員や学級担任が特定の教科指導を担うことで、質の高い授業をめざすとともに、多くの教員が子どもたちに関わることで、児童理解が深まるなどのメリットがあります。「月と太陽」の学習では、子どもたちにとってなかなかイメージがつかみにくい天体の大きさをわかりやすく説明するために、担当の専科教員は算数の授業で学習した縮尺を使って説明しています。子どもたちは教員が用意した10億分の1スケールの太陽の大きさに驚きます。「この大きさの太陽がこの位置にあると、地球はどのあたりかな？」宇宙の大きさに子どもたちは興味を示します。効果的に教科横断的な学習を行うことができることも小学校教員の大きな魅力の一つです。また、授業では一人一台端末を用いて、クイズを行ったり、動画を視聴したりするなど、子どもたちの興味を引き出しながら、わかりやすい授業が行われています。

どのように授業を行えば、子どもたちが興味・関心をもって、わかりやすい授業ができるか。子どもたちと向き合いながら日々教材研究に励んでいます。

主体的・対話的で深い学びを ペリーの再来航について議論する

「ペリー再び来航！鎖国する？開国する？」開国と幕府政治の終わりについて学習する中学2年生の社会科の授業では、担当教員の立てた問いに対して、生徒たちが、鎖国を続けるべきかどうかについて、意見を交わし合う姿が見られます。「私は、今までも不自由がなかったのなら、日本文化を守るために、鎖国を続けた方がいいと思う」「いや、開国しても、文化は守られると思う」「それよりも、米国との関係が悪化することの方が恐ろしいから開国すべきだよ」「でも、開国したら、日本は大きく変化して混乱すると思うな」議論が活発になる中、担当教員が「実際は、どうだったのか見てみましょう」と言って林大学頭とペリーの交渉を再現した動画を見せました。生徒たちの目は、真剣そのもの。教室は、江戸時代にタイムスリップしたような空気に包まれました。

最後は「日米和親条約について、どう考えるか」という問いで、次回の授業につなげました。「正解は、一つではない。大切なことは、自ら考えること」生徒の学びを深めるためにどのように授業を展開するか考えることは、教員という仕事のやりがいの一つです。

中学校



インクルーシブ教育の実践 城郷高校の取り組み

神奈川県ではインクルーシブ教育を推進するために、令和6年度から新たに4校、計18校をインクルーシブ教育実践推進校に指定しています。その一つである城郷高校では、教育目標である「敬愛」をめざし、自他を大切にし、ともに学ぶことのできる学校づくりを進めています。誰もが大切にされ、いきいきと暮らせる「共生社会」の実現のために、知的障がいのある生徒が高校で学ぶ機会をひろげ、ともに活動をする中でお互いを認め合って成長していくことをめざしています。城郷高校では、一人ひとりの課題に対応するために、科目により、ティーム・ティーチングを行っています。また、定期的に校内研修を行い、障がいに対する理解を深めながら、生徒の目線に立ち、教室環境の整備、ICT機器を活用した授業のユニバーサルデザイン化に取り組んでいます。

高等学校



教員と看護師の協働連携

神奈川県では、学校で実施するすべての医療的ケアは、教育の一環（自立活動）と位置付けています。医療的ケアとは、一般的に『日常生活に必要とされる医療的な生活援助行為』とされています。その医療的ケアを必要とする子どもたちが神奈川県の特別支援学校にも多く在籍しています。代表的なものには、痰の吸引や経管栄養などがあります。教員も研修を経て認定証を取得し、看護師と連携を図りながら吸引や経管栄養を実施しています。

医療的ケアを必要とすることを、ハンディとしてとらえることなく、その子の大切なパーソナリティ（個性）としてとらえ、その子のもてる力や可能性を最大限に発揮させることをめざしています。また、将来の自立と社会参加のために必要な力を育みます。教育と医療、それぞれの専門性をもつ視点の相違を教員と看護師が共有するためには、互いの専門性を尊重し理解することが大切です。神奈川県では、そのダイナミクスな相互関係から、多角的な視点を持ちながら子どもに寄り添った医療的ケアを提供しています。

特別支援 学校

